

「新方式教育」をめぐるガsprinスキーの教育改革思想 ——メドレセ改革を中心に——

渡辺 賢一郎

クリミア・タタール出身の社会運動家イスマイル・ベイ・ガsprinスキー（1851-1914）についての研究は1990年代以降盛んになされるようになってきている。それらの研究は、ガsprinスキーをパン・トルコ主義ないしジャディード運動のイデオログとして位置づけており、彼が自らのイデオロギーを実体化するために、学校という「場」の改革を行ったとする。こうした視点に立った従来の研究は、特に彼のメクテブ改革の分析に重点を置いており、メドレセ改革の考察はあまりなされていない。本報告ではガsprinスキーのメドレセ改革に焦点をあて、具体的な改革案を確認する。同時に教育改革をとりまく諸情勢への彼の論説をみることで、ガsprinスキーの評価を見直すことも目的とする。

ガsprinスキーが編集・発行した『翻訳者』紙によれば、教育改革を始めた当初（1883年）、メドレセを対象とした改革については抱負が記されるにとどまり、メクテブの改革に重点が置かれていた。しかし、ガsprinスキーは1892年によくクリミアのパフチサライにあるジンジルリ・メドレセでなされていた教育改革の試みを紹介した後、1894年に「メドレセ問題について」を連載した。メドレセについてのまとまった論説は『翻訳者』紙上初のことである。この連載記事によれば、メドレセ改革の目的はムスリム社会の「進歩」にあるとし、これからのムスリムの生活のためには教育改革が不可欠であるとしている。メクテブでの教育改革の活動と成功を受け、教育方法や学生生活の規則を改善すれば、「旧方式」とは異なり、より短時日で教育の効果を高めることができるとした。

ガsprinスキーは「旧方式」の教育方法について次のように批判している。まずカリキュラムの未整備である。明確な学習目標の不在が長期間の学習を学生に強制するとして、その非効率性を批判した。また母語の読み書きや算数の教育が非常に不十分であり、かつ学力チェックが行われないことも批判した。教授法が理にかなったものではなく、教科書も古いもので、これでは教育効果はあがらないとしたのである。

こうした「旧方式」の教育方法を批判したガsprinスキーは、メドレセ改革案の要諦をまずカリキュラムの整備においた。教育年数の短縮化をはかるため年間計画を明確に定め、

あわせて学年および学級分けを行う。教科についてはアラビア語以外の授業の充実化をはかり、諸科学諸外国語も開講し、学習進度に応じて年一回の試験を行う。また学習言語の実習を行うなど教授方法の整備を行い、さらには効率的な学習に適した教科書を編集する。

メドレセ内における学生生活については、寄宿舎の整備を行い、従来のような家事労働の分担制から学生が学習に専念できる体制へと転換をはかり、また日課を定め、学習・食事・休憩時間を設定する。さらに教師の専門化をはかり、教師もまた教育に専念できる体制を整備し、かつ課程修了者が後輩学生を監督することで教師を支援する。

新方式のメドレセ教育は、その後カザン、バフチサライ、オレンブルクなどが中心地となって開校されていった。こうした伸展のなかで、カリキュラムや教科の変化もおきた。例えば、手工業の技術習得に重点をおいた科目も開講されるようになった。この背景には、教育改革の支援者となった商人・職人層による要請があった。

ガスプリンスキーによるメドレセの教育改革に対しては、メドレセがイスラーム神学教育の拠点であるために、当然従来の教育システムからの批判が予想される。しかし、ガスプリンスキーはオスマン帝国内における改革を紹介し、またイスラームの過去における高度な学問や科学を称賛することで、保守派の批判を回避しようとした。この改革は「よりイスラームらしい」のだと強調することで、決して反イスラーム的な行為ではないと主張したのである。またロシア人による非ロシア人を対象とした教育システムについて、教育方法の違いはあれ、教育効果の高い学校であるとしてガスプリンスキーは積極的に評価した。このような態度は、むろん検閲への対策など政府に配慮したためでもあったが、むしろ地政学的に緊迫した中央ユーラシア情勢を正確に認識したガスプリンスキーが、教育効果を高める学校やメディアをとまれ評価し、もって民族文化の向上をはからんとする、極めて現実的な戦略をとったためだった。彼の改革運動のこのような現実的な性格は、ガスプリンスキーが先行研究の指摘するような単なる「パン・トルコ主義」「ジャディード運動」のイデオログではないことの、一つの現れだろう。

(中央大学文学部兼任講師)